

卒業生紹介

母子保健で世界の平和を!

～生命を大切にする社会を、女性の視点から～



独立行政法人
国際協力機構 (JICA)
国際協力専門員 (保健) /
人間開発部課題アドバイザー

Hagiwara Akiko
萩原 明子

神奈川県出身

1986年お茶の水女子大学文教育学部舞踊教育学科卒業

1988年同大学院修士課程修了 (人文学修士)

1988年から1992年まで、フルブライト奨学生として渡米。米国オハイオ州立大学博士課程修了 Ph.D. (ヘルスプロモーション・健康教育)。

JICA長期専門家 (業務調整・公衆衛生) スリランカ・ペラデニア大学歯学教育プロジェクト、JICA長期専門家 (参加型啓発IEC) ヨルダン人口・家族計画・WIDプロジェクト・フェーズ2、等を経て、2005年8月より2009年6月まで、JICAパレスチナ母子保健プロジェクト、チーフアドバイザー
2008年10月より現職。

萩原明子さんは、1986年にお茶の水女子大学文教育学部舞踊教育学科 (現・芸術・表現行動学科舞踊教育学コース) を卒業後、本学大学院に進学し人文学修士を取得。フルブライト奨学生としてオハイオ州立大学に留学し、ストレスとストレス症状における文化的差異をテーマに博士論文を書き博士号を取得された。学部生の頃から国際協力に強い関心を持ち、日米学生会議にも参加。同会議で出会った男性と結婚され、博士号取得後に日本で長女を出産する。その後、夫の海外赴任に伴い海外で子育てをする一方、自らもJICA専門家としてスリランカやヨルダンで地域保健や保健行政のマネジメントや保健教育を行うようになった。現在は、JICAの保健分野の国際協力専門員として、東京をベースに世界中の母子保健分野への協力を行っている。

母子手帳を世界に

萩原さんのライフワークとなったのは、パレスチナでの母子手帳の協力だという。紛争に翻弄される妊婦に母子手帳を配布し、政府や住民と一体となって、妊婦健診、乳児健診などを普及させた。パレスチナ母子手帳は、2008年からパレスチナ自治区西岸地域で、そして2010年からはガザ地区でも使われ、「生命 (いのち) のパスポート」と呼ばれている。母子手帳はシリア、レバノン、ヨルダンのパレスチナ難民キャンプにも普及している。

シリアから避難するパレスチナ難民の母親のバッグに母子手帳が…

シリアからヨーロッパ諸国へ難民が避難していることは、メディアでも報道されている。こうした難民の母親の小さなバッグの中に、萩原さんたちが作成した母子手帳が大切に保管されていた。長旅の果てに異国の地で出産・子育てに直面する母親にとって、

萩原さんたちが配った母子手帳は、母と子の記録として、言葉の通じない地域で暮らすことになった母子の命綱となる。萩原さんは、自らの活動が母子を支えていることを実感すると共に、国を追われて不安定な状態にある母子に思いをはせる。すべての母子が尊重され安心して過ごせる社会、それが萩原さんの目指す平和な社会だという。

助産師、保健師が守る母子の健康

アフリカの村落では、医療施設も医療人材も不足している。村落でも、安全なお産を実現させるため、スーダンでは村落助産師が育成されている。萩原さんたちは、スーダン全国の5000名以上の村落助産師の現任研修を実施、研修を受けた助産師は、年間10万件以上のお産を介助しているとのことだ。研修後、助産師の多くは公務員として雇用され、村人からも尊敬されるようになり、女性の権利向上にも貢献したという。ガーナの村落には、日本の無償資金協力として64か所もの駐在保健所を建設し、保健師の育成、配置を進めているそうだ。

母として女性として

萩原さんは17歳と22歳の娘さんを育てながら、10年にも及ぶ家族での海外駐在、毎年5-6回もの海外出張をこなしてきた。過酷なキャリアの最大の理解者であり、支援者であった夫を10年前に病気で亡くされたことは、人生最大の試練であったことだろう。シングルマザーとして働く萩原さんを支えたのは、ママ友をはじめとする周囲の女性たちだったという。娘さんたちは、お母さんが本学で身体表現を専攻しダンスに汗をかいた学生時代のように、幼い頃からクラシックバレエを熱心に続けている。先日も、娘さんたちのバレエの舞台が終わったばかりで、本番の舞台を観て感涙にむせたと話されていた。娘さんたちと一緒に歌

舞伎を観に行くのも楽しみだという。地球規模のお仕事をこなしながらも、娘さんたちの活躍を話される萩原さん。その横顔は、母の優しい愛に満ち溢れていた。

後輩のお茶大生の皆さんへ

最後に、お茶大の現役学生たちにメッセージをとお願したところ、開口一番「様々な立場での女性リーダーをめざして欲しい」と言われた。途上国で母子保健の協力を続けてきた萩原さんは、女性の視点こそが、平和な社会を実現させると強く信じている。行政、職場、地域社会など様々な場面での女性の指導力が欠かせない。お茶大の卒業生には、そうした未来を牽引する活躍を期待されているのだろう。本学の卒業生が萩原さんに続く女性リーダーとして輝くことを期待する。またしなやかに逞しく活躍する萩原さんたちの活動により、一組でも多くの母子が幸せになることを祈念する。

インタビュー・文責：基幹研究院人文科学系
准教授 水村 真由美

わたしのオフタイム

アフリカの地方出張ではシャワーも満足に出ない場所に宿泊することも珍しくない萩原さんにとって、ご自身の心身の健康維持はキャリア上も欠かせない。出張のスーツケースには、いつもヨガマットが入っている。最近流行りのラテン系フィットネス「ズンバ」に興じ、フェルデンクライスメソッドというコンディショニング法にも定期的に通って、自分メンテナンスをするそう。母子保健のエキスパートは自分の健康管理も抜かりなかった。